

## 旧制八高と旧制松高

偶然とはいえ、なんだか旧制高校と「縁」がある。大学時代を過ごした信州大学人文学部のキャンパスは、旧制松高の面影が残る「あがたの森」にあった(写真上)。そして、長年にわたり勤めた名古屋市大滝子キャンパスは、古墳など旧制八高の雰囲気が漂う(写真下)。そんなこともあり、まえから旧制高校に関心があった。辻村明『地方都市の風格』2001年を読んで、表題についての理解をいくらか深めることができた。

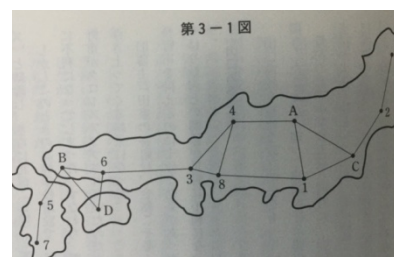


まず八高から。「静岡県との誘致合戦があったようであるが、静岡県はあまりにも東京に近いし、関東と関西との中間となれば、「中京」といわれる名古屋が地の利を得ている。当時はまだ名古屋帝国大学は設立されていないし、徳川御三家の尾張徳川家のお膝元、また軍隊関係では早くから第三師団司令部の所在地であったことが、名古屋をして東海地方ばかりか、中部地方全体のなかで、おろそかにはできない重みをもつ都市たらしめたことが、スムーズな設置の原因となったであろう。それにしても物価も上昇し、3ヶ年の継続負担であるが28万6千余円という大金を市部と郡部とで折半する予算措置であった。」



明治時代に設置された高等学校は八高までの八校の他、山口高校(一時廃校)がある。八高の設立を最後に、しばらく高等学校の増設はなく、再び増設が具体化するのは大正8年を待たなければならなかった。その最初は、新潟、松本、山口、松山の四校同時の設立であった。そして一挙に大量の増設が予定されたので、これ以後はナンバーを追っていくナンバー・スクールは廃止され、設立される地域名を冠するようになっていった。

つぎに松高へ。松本に落ち着く以前に、長野市と松本市との熾烈な争奪戦。長野市提出の「高等学校設立調査書」(大正6年)のなかに写真の第3-1図があり、ABCDという順序で、新設高校を配置していくのが合理的だと主張する。A高にあたる所属府県は群馬・長野・新潟。増設の場合は直線上に並ぶよりは、三角形を形成するように配置する方が、交通や交流の点で効率的であるという。数字は既存のナンバー・スクールの所在地をあらわす。東部地方でそれを考えれば、AとCと一高との三角形になる。こうして真っ先に東部地方にA校を、群馬、長野、新潟の範囲に設置するのが妥当だとしぼり、その具体的な都市として高田市(新潟県)と長野市と松本市との3市の比較



をおこなう。とくに教育の面では長野県、なかでも北信(長野)がまさると結論する。

しかしこのときの高等学校増設で、新潟にも高等学校が設置されることになったが、これは長野市にとっては非常に不利になってしまった。すなわち、新潟には高等学校が置かれない、つまりは信越地方に一校という見通しで、長野市がクローズアップされていたのだからである。新潟に高等学校が設置されることになって、長野が沈んで松本が浮き上がってくる結果になった。

(2016年10月5日)